

「ウニ」を手に入れる

鈴木裕美

以前、演劇人の先輩に「ウニを取って来い」と言われたことがある。

海面から海底を見渡しながらか泳ぎ、「ウニがあった」と発見したのは良い。しかしそこで満足せず、息を詰めて深く潜り、ウニをその手で獲得しろ。そして、岸に上がって、それを私に見せてくれ。

つまり、演劇に於いて、ある『美しいもの』を見つけ出せたら、もっと集中し、もっと深く考え、もっと耳を澄まし、もっと手を伸ばし、もっと神経を研ぎ澄まし、もっと自分を追い込んで、もっとシンプルに、ただその『美しいもの』にアプローチし、その『美しいもの』を確実に手に入れろ。それではじめて、観客にお見せできるものになる、という意味だったのだと思う。この例えは、大変に私の腑に落ちた。それ以来私は、自分自身の演出はもちろんのことなのだが、俳優の演技に対しても、戯曲に対しても、あらゆる表現に対して「これはウニを取ってきているだろうか？」と考えるようになった。

今回「ウニを取って来ている」と私が感じた戯曲は、上田誠さんの『来てけつかるべき新世界』と、田中遊さんの『私と本屋の嘘』だった。どちらも、ご自分が見つけた『美しいもの』に対して、誠実にアプローチなさった結果としての戯曲だと思う。結果として観客が受けとれる「ウニ」の味は、二つの戯曲はあまりにも違う。言うまでもないが、それは趣味や好みの問題で、戯曲賞の選考では、「ウニ」でも「サザエ」でも「伊勢海老」でも、そこに獲物があるかが重要だと、私は考える。

『来てけつかるべき新世界』は 岸田戯曲賞の受賞作だとは知っていたが敢えて選評は読まないで選考会に臨んだ。理由はもちろん、OMSの選考委員の方達の意見に左右されるのは、むしろ望むところだが、別の戯曲賞の選考委員の意見に左右されてはマズイと思ったからだ。そして未だ読んでいない。

”来るべき新世界“＝AI“が最も似つかわしくない舞台として、大阪の新世界が選択されている。その一発アイデアとも思える『美しいもの』に固執し、見事「ウニ」を手に入れていると思う。選考会では、AIと人類の未来に対する洞察が甘いとの意見もあったが、私は上田さんが追求したかった美しいものはそこではないと思う。限りなく演劇に近いコントが存在するように、これは限りなくコントに近い演劇で、そのきっぱりした徹底ぶりが非常に美しいと感じた。

本当の新世界はこうではないとの意見もあった。確かに新世界を舞台にしているかもしれないが、それは最も似つかわしくない場所の総称とも言うべきもので、私は問題にされないと思う。英訳してNYやLONDONでの上演も可能だと思うが、その際はイギリスで最も似つかわしくない場所に舞台を移せばいい。その程度のことだと考える。

選考委員の方達の評価も概ね高かったが受賞には至らなかった。理由は、OMS戯曲賞

が、獲物の種類を重要だと考える側面があるからではないかと思う。それ自体はOMSの特性とも言えると思うので、異論はない。ただ、私としては、「ウニでもサザエでも、取って来たやつのみが対象。まあまあのウニと上等なサザエだったら、上等なサザエが優勝！」という気持ちである。ご理解頂けるだろうか？

『私と本屋の嘘』も素晴らしいウニだと思った。ただ、以前エントリーされた『夜の素』と比べると『夜の素』の方が良かったという声が多かった。自作と比較されるというのも不思議な気もするが、これもOMS戯曲賞の美しい特性だと思う。参考委員の皆さんは過去の戯曲の細部まで良く記憶しておられる。

受賞作の2作品もウニを手に入れている戯曲だと思う。受賞に至らなかった戯曲の中には、「ウニに触ってはいるのだが…」と感じるものが多かった。来年も上等なウニを獲得し、私達に見せていただきたいと大いに期待している。